




社中



あぶら
工房



わたしたちの 体験を お話します

1500年前から日本では一般的な染料として藍が使われてきました。現代においても「ジャパン・ブルー」と呼ばれ日本人に親しまれています。藍染めには多くの洗練された工程があり、これを行える職人はごくわずかです。それでもなお、日本では藍染めが作られ続けているのです。「なぜこれほど長い歴史があるのか。」

私たち社中は青森県内にあるいくつかの工房へお邪魔し、職人から藍染めの歴史を学び、実際に藍染めを体験しました。

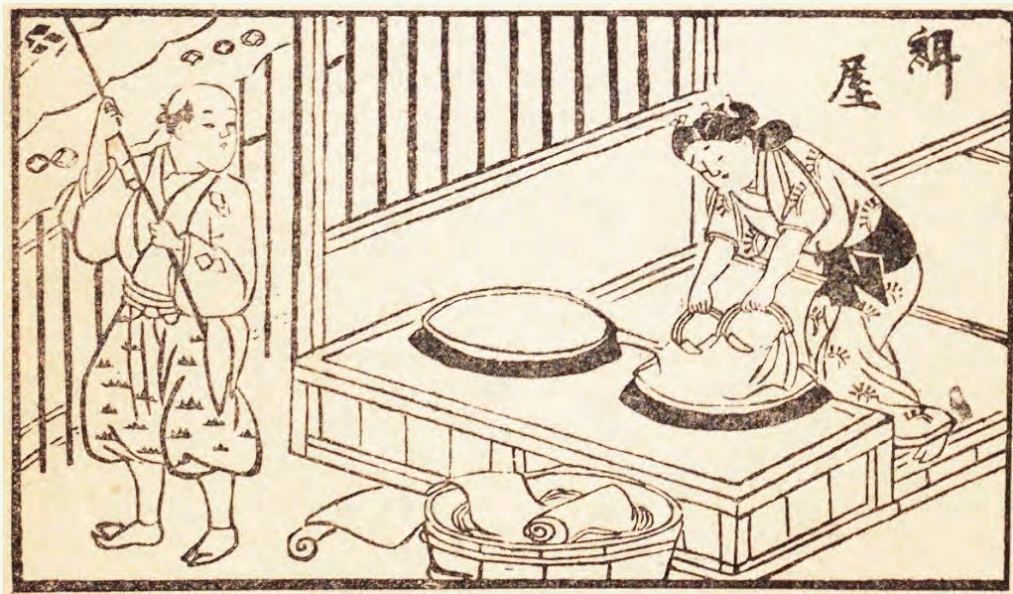
その結果、私たちは藍染めが日本人の一般的な染め物になっていった驚くべき理由を知ることとなったのです。

同時に、なぜ需要が減り、使われる機会が少なくなったのかを知る一方で、時代の流れによって包み隠さず知ってしまった藍染めの「将来性」を知ることができたのです。

受け継がれた

タデアイの

技法



紺屋（こんや）：江戸時代の染物屋。藍染めをはじめ様々な染色を行っていた。
紺屋などの染物業から、歌川国芳などの著名な絵師が排出されている。



一般的に使われている「タデアイ」

一口で藍染めと言っても実に様々な染色法が存在します。

海外ではナンバンコマツナギやタイワンコマツナギなどマメ科の植物が使われることが多く、日本でも沖繩では琉球藍と呼ばれる低木から作られるようです。

私たちが紹介する藍染めは、日本で最も一般的な藍であるタデアイという植物を用いた染色法です。（右の写真）長い歴史の中でも特に江戸時代に多く生産されました。

藍で染められた当時の着物などが現在でも多く残されており、博物館などに展示されています。

藍染めの価値と 実用性

藍染めの原料となるタデアイは、最盛期の日本では様々な地域に生息している植物だったそうです。

それを聞いた時、私たちは頭の中で「一般的に広く使われる理由はこれだな」と単純に考えていました。

しかしその考えは、現在藍染めを生業にしている職人の方々によって容易く覆されたのです。

- ・ 消臭
- ・ 抗菌
- ・ 保温
- ・ 防虫

藍には驚くほどの効能が秘められており、前述のもの以外にも肌荒れやアトピー性皮膚炎の方にも良いとされているのです。

その力は染物だけにとどまらず、藍の葉や種を煎じて服用することで解毒作用や喉頭炎に効果があるそうです。

さらに止血効果もあるとのこと、江戸時代には万能薬のような役割も果たしていました。

まだ化学が進歩していなかった時代にはとても重宝された植物だったそうです。

藍染めとは、単純に染めるだけのものではなく、たくさんの実用的な効能が相まってこそ、一般的な染物になっていったのではないのでしょうか。



藍染めの工程で使用されるかめ

藍染めの衰退



藍色の濃淡のみで描かれた溪斎英泉の藍摺絵(あいずりえ)「仮宅の遊女」はドイツから輸入された顔料が使われている。千葉市美術館蔵

「なぜこれほどの実用性を秘めた物が、衰退してしまったのでしょうか」

藍染めを生業としている職人に聞くには少し心が痛む質問をしました。

合成顔料の輸入

「青森県にも昔はたくさんの染物屋がありました。しかし文政末期(1820年代頃)になるとドイツから合成顔料が入って来ようになり、手間のかかる藍染めが少しずつ減っていったんです。」

以前私たちが訪れた伝統的な製法の藍染め工房店主はそう語っていました。

日本では時代が進むにつれ、ドイツから安価で手に入る合成顔料「ベロ藍」の需要が高まりました。

安価な顔料が大量に入手できるようになると、葛飾北斎、歌川広重ら浮世絵師などにも多く使われるようになり、日本の芸術はさらに大きく進歩していったのです。

一方で藍染めは需要が減り、明治時代になると多くの染物屋は廃業していきましました。

藍染めは時代の流れに飲み込まれてしまったのです。



葛飾北斎作「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」



歌川広重作「名所江戸百景 水道橋駿河台」

合成顔料が使われた 藍摺絵



歌川国貞作
「中万字や内 八ッ橋」



伝統的な 藍染め

現代的な 藍染め



合成顔料が一般的になった現代でも、伝統工芸として藍染めを作り続けている職人がいます。伝統的な藍染めでは、時間をかけてタデアイの葉を発酵させ藍玉（すくも）と言われる原料を精製します。非常に手間のかかる製法で、工程ごとに職人が存在します。現在でも徳島県ではこの製法が多く採用されています。

しかし、今回私たちが青森県で出会い、将来性を見出した藍染めは現代的な製法で作られています。

青森市浪岡に工房をかまえている「あおもり藍工房」この工房は浪岡の道の駅内にあります。

あおもり藍工房では、伝統的な製法に現代の原料を組み合わせることで藍染めの「色移り」をほぼ完全に防ぐことに成功しました。つまり、他の衣類と一緒に洗濯しても影響を与えないということです。伝統的な製法だけでは解決できなかつたこの問題を化学を用いて解決したのです。（特許を取得しています）

これにより、現代の生活でも気軽に藍染めを楽しむことができますようになりました。

さらに、藍染めの工程で多くの時間と人手を必要とする「すくも」を精製する工程を省く生産方法を採用し、より効率的に藍染めを行うことができるようになり、本来の効能（消臭や防虫など）も健在した、まさに「鬼に金棒」と言っているほどの革新的な染料となったのです。

2021年、私たち社中はこの藍染めと出会い、工房やタデアイを育成している畑にお邪魔し、収穫や乾燥、染料になるまでの工程を学びました。

特に染料の精製では、pH値の



収穫後の藍畑：厳選されたタデアイのみを収穫し染料に使用します。

安定化や温度を慎重に管理しており、学べば学ぶほど、奥が深い染物であることがわかりました。

同時に、この藍染めを多くの人に知ってもらうにはどうすればいいのかメンバーで話し合いを続けました。

2年後の2023年3月、私たち社中メンバーがあおもり藍工房に揃ってお邪魔する機会がありました。

そこで工房代表の藤井さんから「藍に捧げた20余年」を聞かせていただき、私たちがこれから何をすべきか、どんな心持ちで行動すべきかがはつきりと見えてきたのです。